# 景勝地「田之浦」とやきもの

主任学芸専門員　深港　恭子

## はじめに　景勝地「田之浦」

鹿児島屈指の景勝地の一つに「田之浦」がある。鹿児島市清水町にある多賀山公園一帯を指し、小高い丘が鹿児島湾に面するその眺望は、「東方遙かに高千穂の峯を望み、西は蒼海に開聞岳を浮かべ、前面は近く桜島に対し、遠く高隈の秀峰を望む」（『磯乃名所旧蹟』）と記される。18 世紀初めに成立した、鹿児島の代表的な景勝を選定した「鹿児島八景」においても、「多賀晴嵐」、「田浦夜雨」が選ばれている（『薩藩名勝志』他）。

このように景勝地として知られた田之浦の地は、一方でさまざまに利用されてきた。中世には東福寺城や浜崎城が置かれたが、江戸時代に入ると、良英寺、永福寺などの寺院が創建され、島津家の別邸も建てられた。『天保年間鹿児島城下絵図』には、「田之浦御茶屋」が描かれているのに加え、『隅陽記』によれば、元禄 16（1703）年に、「かごしま田之浦御かりや御普請有之」とあって、加治木島津家の島津久季が御假屋（別邸）を建てている。そしてやきものの窯場もまた、江戸初期から築かれていた。

## 高麗人の窯場

白尾国柱が著した『麑藩名勝考』には、「田浦」と題し、「むかし海砂を鐃して鉄を採りし處といふ、又高麗人をして陶を焼しとて、鉄竈或は陶穴の迹山半に遺る」とあって、田之浦でやきものが作られていたことを伝えている。これを裏付けるように、正徳 4（1714）年の「山元小右衛門口上覚」には、「田之浦ニ而御用之薬掛之瓦御焼せ被成候」とあり、朝鮮半島からの渡来陶工であった芳珍の二男喜兵衛とその子小右衛門が田之浦で御用品の釉薬の掛かった瓦を製造していたと述べている。

元禄 9（1696）年の大火により鹿児島城も火災に見舞われるが、発掘調査によって検出されたその際の火災層に、釉薬の掛かった平瓦や丸瓦が含まれていた。これらの瓦が、小右衛門らが携わった田之浦窯の陶器瓦に相当すると考えられている。小右衛門はその後加治木に移住して薩摩焼を製造するが、田之浦での陶磁器製造が継続されたかどうかは不明である。

次に田之浦が窯場として登場するのは幕末期のことである。文献により情報が錯そうしているものの、現段階では、筆者は慶応年間（1865-68）頃に薩英戦争の影響を受けて、藩によって田之浦に窯が築かれた可能性が高いと考えている。この窯場が廃藩置県を経て民営の田之浦陶器会社へと展開していく。

## 田之浦窯の近代

明治 5（1872）年、鹿児島に行幸した明治天皇が田之浦陶器会社を訪れている。その頃に撮影された窯場の様子が右上の写真である。しかし、同社は西南戦争の影響を受けて明治 10 年に倒産。その後、二つの窯場が形成された。一つは、田之浦陶器会社の跡地を奥常次郎・平岡八郎太夫が引き継ぎ、さらに柿本尚五郎が窯元となって明治 14 年の内国勧業博覧会に出品するものの、明治 17 年頃に廃窯となった。もう一つは、明治 13 年頃に瀬島熊助によって新たに窯場が設けられ、平岡慶之助、汾陽光廣、船崎吉之助を経て、明治 33 年頃、すでに鹿児島市内で手広く陶磁器業を営んでいた慶田政太郎の所有に帰し、数々の優品を世界に送り出した慶田窯が発展を遂げていったのである。

「田ノ浦陶器製造所」 藤崎直高　1872 年　東京国立博物館研究情報アーカイブス「古写真データベース」より

当館には、ここに挙げた窯元のうち、瀬島、柿本、船崎、そして慶田の製品が所蔵されており、当時の薩摩焼の姿を伝えている。

左：錦手牡丹図花瓶　銘「奉納　鹿児島田之浦瀬島陶器製造所　明治十五年一月五日」瀬島政助／右：錦手花鳥文鷹彫刻飾壺　銘「柿本製」「日本薩摩」　柿本尚五郎

## おわりに

高温で焼成する登り窯は市街地に適さないことから、市街地に近く、登り窯に適した傾斜地のある田之浦に、早くから窯場が置かれたのではなかろうか。また、南薩地方から船で運ばれる白色陶器（白薩摩）原料の調達にも、製品の運搬にも、海に面した立地は好都合であったろう。

錦手鹿児島八景図大皿　慶田政太郎

慶田窯の製品に、鹿児島八景を描いた大皿がある。小山田発電所が選ばれているので、近代の新鹿児島八景である。そこにも、「田之浦遊図」と題した雪景が描かれている。

〈主な引用・参考文献〉
拙著「描かれた鹿児島の風景」（鹿児島大学鹿児島環境学研究会編『鹿児島環境学特別編　地域を照らす交響学』南方新社、2013 年）
姶良市誌史料集刊行委員会編『姶良市誌史料二』（2014 年）
拙著「田之浦陶器会社・苗代川陶器会社について―藩窯から民営会社への転換―」（黎明館編『薩摩焼資料集　華麗なる薩摩焼の近代』2019 年）
鹿児島県立埋蔵文化財センター編『鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）』（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (211)、2021 年）

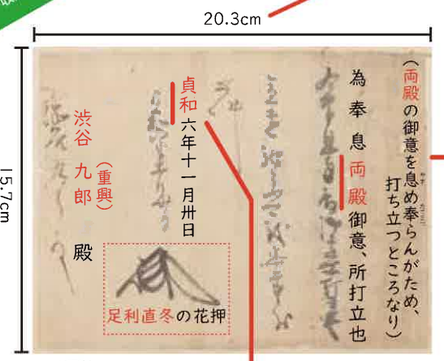


学芸員 EYES!

学芸員イチオシの収蔵資料を紹介します。

第7回 足利直冬軍勢催促状

# 南北朝期の混沌（こんとん）とした情勢を伝える古文書



学芸専門員
吉村晃一（歴史担当）

**注目ポイント①　文書のサイズ**

とても小さな紙に認（したた）められています。これは主命（しゅめい）を帯びた密使が敵方に奪われないために、髻（もとどり）などに隠して携行するための工夫であったとも言われますが、確証はありません。

**注目ポイント②　「両殿」が指す人物**

「両殿」とは、尊氏と直義を指します。直冬は尊氏から討伐の対象とされているのにも拘（かか）わらず、「尊氏・直義のために、挙兵するのだ」と偽りの大義名分を掲げています。尊氏から直冬追討の命を受けながら、このような直冬の軍勢催促状を受け取った武士たちはとても困惑したことでしょう。

**注目ポイント③　「貞和」の年号**

この年２月に「観応」に改元されているのに、直冬は 11 月になってもいまだ貞和年号を使用し続けています。これを「尊氏に対する抵抗の意思表明」との指摘もあります。この時期の九州では、尊氏方、直冬方、南朝方が三者三様の年号を使用しており、このことは、混沌とした鼎立（ていりつ）状態を象徴しています。

南北朝の動乱は、幕府内における足利尊氏（たかうじ）の弟・直義（ただよし）と、執事・高師直（こうのもろなお）の対立に端を発する観応（かんのう）の擾乱（じょうらん）もあり、複雑な対立状況を生み出します。南九州の武士たちのもとにも各陣営から軍事協力を求める文書（軍勢催促状（ぐんぜいさいそくじょう））が届き、彼らはいずれに与（くみ）するべきか、生き残りを懸けた難しい判断を迫（せま）られました。

写真は、足利直冬（ただふゆ）が薩摩国入来院の武士・渋谷（岡元）重興に宛てた軍勢催促状です。直冬は尊氏の庶子でしたが、尊氏から疎（うと）まれ、直義の養子となりました。そのため、観応の擾乱では、尊氏から討伐の対象とされ、九州に逃れます。そして、九州各地の有力武士たちに軍勢催促状を発し、勢力拡大を図（はか）ります。その結果、九州は「宮方（懐良親王（かねよし））、将軍方（尊氏）、同じく佐殿方（直冬）とて、国々三つに分れしかば、所々の軍休（いくさ）む時なかりけり」（『太平記』）という、混沌とした情勢に陥（おちい）りました。

この軍勢催促状をはじめ、これを受け取った渋谷重興がどのような決断を下したのかについては、今秋開催の企画特別展で紹介する予定です。お楽しみに。

参考文献：瀬野精一郎『足利直冬』（吉川弘文館、2005 年）

黎明館のフカボリ 8

## 黎明館を深掘り！？ その巻

黎明館は、鹿児島（鶴丸）城本丸跡に建っています。昭和53年～54年には、黎明館建設に伴う発掘調査が行われました。この時の発掘調査では、奥御書院や麒麟之間など、本丸御殿の建物の跡が多数確認されました。今回は、その時の様子を一部紹介します。

黎明館の北口

### 北御門

発掘調査でみつかった江戸時代の階段や排水溝の奥に建設途中の黎明館が写っています。
この場所には、北御門という門が建っていました。
黎明館北口前の橋は、上面は舗装されていますが、今でも江戸時代に造られたものを使っています。

黎明館の北側

### 路面電車

黎明館が建設されている時には、黎明館と鹿児島医療センターとの間に路面電車が通っていました。この路線は、鹿児島電気軌道株式会社によって昭和２（1927）年に敷設され、のちに鹿児島市電上町線となり、黎明館開館２年後の昭和60（1985）年に廃線となりました。

鹿児島城下絵図屏風
玉里島津家資料　部分

**北御門（きたごもん）とは？**

御城門は特別な時しか通行できなかったので、鹿児島（鶴丸）城に勤める武士たちは、普段は北御門から出入りしていました。
西郷隆盛や大久保利通も、この門を通って登城していました。